

## 若宮の人々

松葉谷の草庵を焼き討もされた聖人は、富木殿及び門下のすすめに従って、千葉の若宮（今の中山）に身を逃がれたのであった。聖人の大法弘通の一日もゆるがせならざることを思つて、自分の屋敷に招いた聖人に、富木殿は百日間の御説法を願つたのである。そしてその間に、松葉谷の草庵の再建工事をすすめられたのである。

ここで、富木殿及びこの百日間の説法中にいよいよ信心を深くされた、太田乗明や曾谷教信等の御信者について略述してみよう。

富木殿は富木五郎左衛門尉胤継、字は常忍といい下総若宮の領主で後に出家して常修院日常といわれ中山法華経等を開創せられた。聖人より二つ年長で、建長六年下総より鎌倉にいたる船中で、宗祖の法話をきき入信したと伝えられておる。現在京浜電鉄金沢八景駅より五、六丁のところに船中問答の寺というのがある。その辺に富木殿の船がついたのであろう。富木常忍は聖人の俗縁があつたと伝えられておる。富木、太田、曾谷の三氏はともに鎌倉の文官で門註所出仕であ

った。

聖人が富木常忍に賜わった御書の総数は凡そ四十三編という多数にのぼり、その中には「観心本尊抄」「四信五品抄」等々重要な御書がある。母堂が九十余歳の高齢をもつて死去されその納骨のために身延に登山せられたが、この時感激法悦の余り、自分のもっていた御経を忘れて帰られてしまった。そこで幸便があつたので聖人は「忘持経事」という御書を賜わって「はんどく尊者は名を忘るこれエンブ第一の好く忘るる者也、今常忍上人は持経を忘る。日本第一の好く忘るる仁か」と戒められたことは有名なことである。

富木常忍は太田乗明の姉を妻としたが、早く死んだので後妻を貰った。後妻の連つ子に二男一女があつたが二男はともに僧侶になつた。長男は即ち六老僧の一人第五日頂上人であり次男は日向上人の弟子となつて重須談林の学頭にまでなつた日澄上人である。日頂上人は、日向上人とともに池上における宗祖日蓮大聖人の御入滅の時にその葬列に加わつておらない。日興上人の執筆した「御遷化記録」にも日昭、日朗、日興、日持の名はみえるが、日向と日頂の名はみえない。

おそらく余程遠隔の地に布教されていて、御葬送に間にあわなかつたのであろう。弘安七年十月十三日中山の富木殿の所で宗祖聖人の第三回忌が営まれた。この時日頂上人は鎌倉に布教中で、天台宗の僧侶と宗論を戦わしてようやくこれを降参させ、昼夜兼行で中山にかけつけだが、遂に第三回忌の法要におくれてしまった。この時富木殿は、宗祖聖人の葬式にも間にあわず今またこ

の第三回忌の法要にもおこなわれてきたことを怒って「法論は僧侶としては日常茶飯事である。大聖人の三回忌は再びめぐってはこない。今日この悪例を残すことは、大聖人御在世中法問ふれ頭として門下の上になつておつたこの富木常忍の許さざる処である。将来法論に名をかりて大聖人の法要に欠席するという悪例を残すことのないように」

と御焼香も許さず、七年の勘当を申し渡したのである。

日頂上人はその夜より庭前の銀杏を経行して十七昼夜、深く深く懺悔の意を表して謝罪したが、富木常忍の翻意を得ることも出来ず、遂に漂然と正法弘通の旅に上られたのである。これが有名な「泣き銀杏」の話である。

連つ子の日頂が勘当の身となつてから、我が子の不首尾に責任を感じたか、富木殿の後妻は故郷である富士重須（現在の北山本門寺附近の地名）に帰られてしまった。

「入道（富木殿を指す）六十歳弘経導師の大願を企てて妻子を離別す」というのはこのことを指すのである。

日頂上人は晩年富士の日興上人の許に來られて、入滅された。日頂上人の墓は北山本門寺の本堂裏二丁余のところにある（正林寺）、土地をうず高くもり上げその上をびやくしんのような美しい樹がはつておる特別に変つたお墓である。勘当の故に石塔をたてないのだと伝えられる。

日興上人を非常に厳格の如く解しておる人もあるが「泣き銀杏」の日頂上人が富士に來て亡く

なっておりますことを考えると、弟の日澄上人がおったり母親がおったという姻戚関係以外に日興上人には、この大聖人の葬式にも不参をしましたその第三回忌の法要にも遅延して七年の勘当を受けたという日頂上人を、不幸な人として受け入れる溢れるばかりの温情があつたのであろうと思ふ。

太田乗明は問註所出仕であり、聖人と同年である。この人の姉が富木殿の妻であつた関係上、聖人の教化に浴した。一説にはその妻女は道辺右京の孫で聖人の従妹であり、この縁により聖人御遊学中の学資は太田家より支給されたとも伝えられる。

太田氏に賜つた御書は約十四編あるが、その中に「三大秘法抄」があることを忘れてはならない。賜書を通じてみて太田殿は相当に裕福であつたとみえて、聖人に資援すること多く、聖人身延入山後は、月々の糧米を奉納した程である。

太田氏の子息は聖人の弟子となり、日高上人という。現在中山法華経寺のある所は太田殿の屋敷跡である。富木殿の屋敷は若宮戸にあり、のち寺になるに及んでこれを法華寺といい、中山のを本妙寺といつたが、後両寺統合して本妙法華寺と称したと伝えておる。太田殿の子息はこの中山法華経寺の第二代となつた方である。

曾谷入道は下総の曾谷に住したので曾谷姓を名乗り、諱は教信、二郎兵衛尉と称し、聖人とは従兄弟の関係があつて御遊学の資を奉つたという説もある。太田氏とともに入道して法蓮日礼と

いい弟も出家して大進房三位房となり、子供も出家して日進、日源といった。いかに曾谷氏が信仰に熱心であったかがわかるであろう。

首題房日唱のこと。中山の近くの柏井村に鐘阿弥という人があつた。当時近村にも聞えた念仏者であつたが、この頃日蓮法師という人が近くの中山にきて、念仏は無間地獄の業なりと誹謗すると聞いて、憎き坊主めと口に念仏を唱えながら聖人の法席にきて問答を試みんとしたが、一言のもとに口を閉じて捨邪帰正し、今後は念仏を全く申さじと誓い、これまで念仏口唱の罪業を滅せんとて一心不乱強情に題目を唱えた。その声昼夜村内に響き渡り聖人の弟子となり首題房日唱と名を賜つた。この人従来念仏を唱えるには鐘を叩いておつたが、今その念仏をすて鐘も叩かず、お題目の時にさびしいと聖人に申し上げたところ、聖人にそれでは太鼓を叩いたらよからうといわれ、この首題房が一番最初に太鼓を叩いたといわれておる。日唱の子供も弟子となり日恵と称し、父の家を転じて寺となし今嶋山唱行寺と呼ぶ。

